超ひも

しょん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
超ひも

【Ｎコード】
Ｎ１４７８ＢＡ

【作者名】
しょん

【あらすじ】
似非中世ロンドンが舞台、奇妙な双子の短編集

望遠鏡をのぞいてみてよ（前書き）

自分の自分による自分のための小説

望遠鏡をのぞいてみてよ

「望遠鏡をのぞいたら、そこに何があるとおもう？」

「望遠鏡をのぞくんだから、宇宙が見えるに決まってるさ」

森の見える丘に腰掛けて、真夜中の星の真下

少年と少女がいた

小さな望遠鏡を、目を細めて見ている少年と、

その横を体育座りで真上を見上げる少女。

「遠く遠く、何を見ても、絶対写るのは宇宙さ。

だってここは宇宙なんだからさ。」

少女の問いに少年は意気揚々と答えた。

「じゃあ、宇宙じゃないのはどこ？」

「望遠鏡さ。」

「それは変な話ね。

ここは宇宙なのに。」

おや、このふたり
よくよく見れば、顔と声が瓜二つ

双子の弟はつづけた

「じゃあ君に、
そのナゾをといてあげるよ。」

地面を望遠鏡でずっと見ていた少年は、姉のほうに望遠鏡を向けた。

「どんなナゾ？」

「解明の鍵は望遠鏡さ。」

理解できない少女は、興味なさげにふーんと適当に相槌をすると、
また星を見上げた

「いけないのなら、
せめてのぞくだけ
でも、許してよ。」

となりの姉にも聞こえない小さな声でぽつりと弟は呟くと、また望
遠鏡に目をやって、今度は満点の星空を見上げた

向こうの方には見慣れないぼやけたオレンジがたくさん

「なにあれ？炎？」

「ああ、きっとあれは、」

説明したら、君は悲しげに笑った

君と僕とが、似てるけど
全然違う証拠

一つ目は髪の色
二つ目は気持ちの重さ
三つ目はそう、今

そうして僕は
たくさんの宇宙を、つくりはじめた

さあ、望遠鏡をのぞいてごらん？

ここはどこ？宇宙さ

たくさん赤いレンガが敷き詰めあうその上を、馬のひづめと真っ黒な車輪ががたがたと蹴っていく

あの高貴な馬車は一体どこへ向かうんだろう

昼間でも薄暗い山道を孤独に走っていくんだろうか

それとも田舎のお屋敷へと畑の横の道を人の目を引きながら走っていくんだろうか

いやいや

確かきょうは大きな街で、一年に一度の大きなパーティーが開かれるらしいから、きっとそこに行くんだろう

想像力豊かな少年は、指を顎に当てて、ふむと考えるそぶりを見せる

いささか探偵気分でも味わっているんだろうか

すると急に後ろに振り向いて真っ黒いブーツをてんっと鳴らせて、

すぐそばの路地へと入っていった

さっきまで持っていたパーティーのビラを投げ捨てて

とあるサーカスのはなし

ここに期間限定のサーカスがくるんだってさ

ある日のこと
いつだったかは忘れたけど、そんな噂がこの街にたった

ただの噂
いついらっしゃるのか、どこで開かれるのか、目玉はなにか、そんなのは誰も知らない

だけどみんな噂好きだったらしく、気づけば大きな街の方にもその噂は広まっていった

謎のサーカス

誰が言い出したのか分からないそんなうさんくさいものに興味を持った変人は、退屈で金と時間をもて余した高級の貴族たち

余ったお金を使って、調べに調べ尽くしたらしいけど、結局は誰かの作り話だったらしい

誰一人、謎のサーカスを見に行くことはできなかったんだって

だけど

主に命じられて、
下水道の中、
大きな館の屋根の上
薄暗い不気味な森の奥
とうとうえんぴつ塔のてっぺんまで

ひいひい言いながら探し回ってた小間使いの姿は、当時の風物詩となって、見ている人たちを楽しませたそうだ

機械音痴の電気屋

僕たちのすむ小さな集合住宅の隣のとなりに、ランプを売っている店があった

そこで働いている一人の優しい若い男

こじんまりと静かに佇むこの通りと同様にその店も静かにそこにあった

「ペーターのところに遊びにいこうよ！」

まあるい緑色の目をきらきらさせて輝かせる少女

少女が差し出した真っ白い手を、これまた白い手が受けとった

「ペーターのことだから、どうせ今日も暇してるんだろうね。」

その白い手の持ち主は、少女と瓜二つの顔をして、まるでそっくりに笑う少年

「あたし達が行ってあげなきゃ、あの店にカビが生えちゃうもん。」

「ペーターは陰気だから」

「ペーターは陰気」

「「ペーターは陰気」」

ブーツの足音に合わせておかしなリズムを刻みながら、二人の歌声は静かな通りに響いていった

「私が、陰気ですって？」

にこにこと優しげに笑う若い青年
少々毒々しく言ったつもりだったけど、まるで臆しない幼い子
目の前で自分を貶しながら笑う双子にため息をついた

「だってお客さんが入ってるの見たことないよ」

「だってランプ屋なのに薄暗いよ」

「だってペーターいっつもランプ磨いてばっかりだよ」

「だってペーター店から出ないよ」

「だって壁の隅っこに、カビ生えてたよ」

「ほんとですか！？」

二人の責め苦に耐えながらも、カビがはえているということには驚いて、思わず声を荒げた

ガタンと勢いよくイスから立ち上がった彼を見た双子は愉快そうに吹き出した

「嘘に決まってるじゃん！！」

「ペーター、もしかして信じたの？」

「あー
でも未来形としては有り得るよね。」

「この調子じゃああと半月にはカビ屋敷だね！」

「未来のペーターだ！
未来から来たペーターなんだよ！」

「ああ！
だからペーター驚いたんだ
今のうちにカビを消す予定で過去に来たのに、もうカビが生えてたから！」

「きゃはははは
カビ屋敷のペーターだ」

「ランプ屋じゃないよ
カビ屋のペーターだよ！」

想像力豊かな双子の会話
よく理解できないけど、彼が貶されていることは分かる
それを無視してペーターはため息をついた

とりあえずカビが本当に生えていたわけじゃないことに安心した

どこか自信のない自分にも呆れた

「ところでさあ、ペーター」

「今日はどうしてランプを磨いてないのさ？」

薄暗い店の奥
もっと薄暗いところでイスに座って、ペーターはいつもガラスの球を磨いていた

くもりがないように
毎日そこで磨いていたんだ

だけどどうだろう
今日もそのイスに座っているペーターだけど、手に持っているのはガラスではなく一枚なく紙切れだった

「その紙なに？」

「ランプはどうしたのさ」

紙に興味を持った双子がそれを取ろうとしたのをあわてて立ち上がって、幼い彼らの背の届かないところまで持ち上げる

取られたら最後
もしかしたら破られてしまうかもしれない

そう思ったのかもしれない

「見せてよ」

届かないことを理解して無様に飛び回らない双子はある意味賢い

「だめです。
これは大人にしか分かりません。
子供が見るような紙ではないのですよ。」

「いいじゃん、ちょっとくらい」

「差別だよ、差別！！」

「差別じゃありません。
とにかく貴方方が見ても理解できないでしょう？」

「分かるよ！
家庭教師雇ったから」

「色々勉強してるしね」

「貴女方の家庭教師というのは、隣のミリアーナのことでしょう？
まともにお勉強なさっているなんて聞いたことありませんよ。」

「うわっ
なんで知ってるのさ！？」

「店から出てないくせに」

二人の饒舌な口に彼も負けてなかった
にこにこと微笑むと、紙を高い引き出しにしまって双子に振り向いた

「認めましたね？
まだ貴女方が見るのは、早いということです。」

「カビ屋のくせに！」

「あーぁ、やめやめ
今日のペーターはケチだよ」

「意味のないことはしたくないのですよ。」

「帰ろ、今日のペーター嫌い」

「ミリアーナに言って、まともな勉強でもしよっか」

ぶうとふてくされる双子を彼は笑って、入り口まで見送った

ガラガラと扉についたベルが鳴る
双子はくるりとペーターに振り向いて、手をふった

「さよなら、ペーター」

「お元気で」

「さよなら、ペーター」

「お元気で」

二人は薄暗いランプ屋をあとにした。
外はもう真っ暗になっていて、そのランプ屋の窓から漏れる光が明るく見えた。

「ねえ、
今日のランプ屋、ひとつもランプが置いてなかったね。」

「一つはあったよ。
テーブルの上で光ってた。」

「どうしてかな。」

「ランプ磨いてなかったしね。」

「代わりに大きなバッグが置いてあったよ」

話しながら家に変えると、

ぽっと僕らの家の玄関のランプをトニーおじさんがつけていた。

「トニーおじさん、トニーおじさん」

「おや、どうしたんだい
今日は早いお帰りで」

脚立の上のおじさんは僕らに気づくと、
茶色の自慢のひげをさすって、
脚立から下りてきた。

「今日は家庭教師の授業はない日なのさ。」

「ミリアーナは腹痛で寝込んでるんだって。」

「ほっほっほ
そうかいそうかい
後で薬でも持ってってやるといい」

「やっぱ腹痛だからね、下剤でもあげて全部出しちゃえば、一瞬で楽になるよ。」

「えー
もしかしたら、血の日かもしれないよ。」

「あ、
もしかして今血の日？」

「僕はまだ血が来たことないよ！」

下で繰り広げられる小さな住人の会話にトニーは困ったように自分の大きなお腹をさすった

ミリアーナには、私から渡しておこう

二人が渡す前に腹痛を直してもらわなければ

「あ、トニーおじさん
もう火が消えてるよ」

双子の姉は僕達を照らす明かりがないことに気づいた

「おやおや、ほんとだ
最近風が強くてね、すぐ吹き消されてしまうんだよ。」

そう言って、トニーは大きな体を揺らして脚立に登った

「もしかして、ランプのガラスが割れてるんじゃないの？」

「よく気づいたね、そうなんだよ
この間ランプをつい落としてしまってね、
すっかり穴が空いてしまったんだ。」

「それが原因だよ」

「そうなんだけどね、いつも買いにいくのを忘れてしまうんだ
脚立の上にいるときは買いにいかなくちゃなと思うんだけどね、ほれ降りてみればすっかり忘れて、今日の晩御飯でも考えてるんだよ」

「じゃあ、急いだ方がいいよ」

弟がおじさんを見上げて言った

「そりゃ急いだ方がいいだろうけどね…」

「僕達が代わりに行こうか？」

おじさんが姉を見た

「そりゃ悪いよ
落としてしまっては大変だ」

「じゃあトニーおじさん
今日は忘れちゃいけないよ」

ぽっと今日二回目の火がランプに灯った

「ああ、忘れないさ
君たちと約束したからね」

ギシギシと脚立に悲鳴をあげさせながら、トニーは下りてきた

「さあ、おじさん
買いにいこう！」
「え？何をだい？」
「だめだこりゃ」

二人はそんなおじさんをあとにして、アパートの中に入っていった

「あのおじさんがランプを買う確率は？」
「０．００１パーセント」
「あのおじさんがランプを買うことによってペーターが考え直す確率は？」
「０．０００００００００１パーセント」
「ペーターがここに残る確率は？」
「０．００００００００００００１パーセント」
「ペーターがここを出ていく確率は？」
「９９．９９９９９９９９９９パーセント」
弟は小さな紙切れによく分からない数字の羅列をならべて、答えた

どこぞの博士のように丸い縁なしめがねを耳にかける
かけた途端それを投げ捨てて、目を押さえた

「何これ、兵器だ！！」

「バカだね、それは眼鏡だよ
目がいい人がかけると針でつつかれるって父さんが言ってたじゃん」

「こんなの目にかけたら、もっと目が悪くなるよ」

涙目を押さえる弟を放っといて、バルコニーに出た姉は柵から身を乗り出して、隣のとなりの家の窓を見つめた

「まだランプはついてるよ」

「ランプ屋だからね、点いてるに決まってるじゃないか」

「ふーん」

窓の明かりに照らされて、ある男の細いからだがもっと細くなって伸びていた

真っ暗い影が通りの向こうに消えていくのを、姉はじっと目に焼き付けるように見ていた

次の日から、トニーおじさんが1日に2回もランプに火をつけることはなくなった

今度あの陰気なランプ屋に新しい店が入るらしい

双子は笑って、その店を迎えた

黒猫Ｍｒ．ジョセフィーヌの解答

「探し猫、
探してます。」

「種類は三毛」

「白に黒と茶色の斑模様」

「ジョセフィーヌ、と呼べば寄ってきます」

「どうか、ジョセフィーヌを見つけた人は、役場まで」

「謝礼金
５万円…」

双子がこの町の役場前で遊んでたときのこと

落ちていたビラを拾うとそんな内容が書かれていた

「５万」

「５万あったらなにができるかな？」

「ハチミツ漬けが１０個買えるよ」

「フランボワーズが１００個買えるね」
「スノウマフィンだって１００個買えるさ」
「レネガーさんのところのチョコレイトとクッキーも食べれるよ」
「スティックキャンデーも食べ放題さ」
「探そうよ」
「探そうか」

いやらしい笑みを浮かべた二人はお揃いのブーツを鳴らして、スキップをしながら大きな通りの方へ消えていった

こそこそと歩きながら、手にもった大きな虫眼鏡で路地裏を散策する
「だんご虫！
この猫を知らない？」
クレヨンで書いた特製の猫の似顔絵を書いた紙を町を行く小さな人に聞いてみる
もちろん答えてくれないんだけど
「バカだね、
いつまでふざけてるつもり？
そんな虫けらに聞いて意味なんてないさ」

虫に話しかける姉を馬鹿にして、弟は猫に特製の似顔絵を見せていた

「ねえ、
この三毛猫知らない？」

ふーーっと毛を逆立て、威嚇してくる猫に構わず、へらへら笑いながら聞く弟

「駄目みたい
この近くにはいないみたい」

「捜索に5万も出す人が主だからね、余程高貴な猫と見た」

「こんな路地裏にはいないわけだ」

「じゃあ大きな町の方に行ったんじゃないかな？」

「行こう」

「うん」

路地裏を抜け明るい道へと走っていった

「おや、小さなホームズさん
そんなに急いでどこに行くのかな？」

少し高めの男の声
聞き覚えのあるその声に二人の足は止まった

「ビッキー！」

「ビキ
てか何？
ホームズってあんなおじさんと一緒にしないでよ」

少しふてくされた様子だけど、大きな虫眼鏡にかわいいおそろいのベレー帽を被った容姿は彼を意識したとしか思えない

「ふふ、ごめんね
あんまりにも可愛かったから」

少年は笑う
双子よりも年上だけどまだ幼い様子なのに、年の割には大人びた服を着て、雰囲気も落ち着いている

「ありがと、世辞はいらないよ」

「ビキは婦人相手に世辞ばっか言ってるもん」

「ん？女性をほめるのは悪いこと？」

「別に悪かないよ
でも僕はうれしくないよ」

「それより、何その格好
今日何かあるの？」

「ひみつ

まだ子供には早いよ」
「君だって子供じゃん」
「マセガキ
あ、思春期ってやつ？」
目の前の少年を見上げてけらけら笑う
馬鹿にされたら馬鹿に仕返す
双子は負けない
「そうかもね
双子くんも来る？」
「行く」
「ジョセフィーヌはどうするのさ」
「一時休戦！」
「よし来た」
「じゃあドレスを見に行こうか」
「ドレス？」
「まさか」

勘の良い弟ははっとした目で自分より身長の高い男を見上げる
彼は横目で彼をみて笑った

「さあ、一緒に来るんでしょ？

夜会に」

さあお手をどうぞ

そう言って姉に腰を折って手を差し伸べる
彼があんまりにも妖艶な雰囲気を醸し出すので、姉の手はビキではなく弟がいそいで握った

「マセガキ！
ばーかばーか！！」

「ビッキーは年上好き」

「熟女好き」

「へんたい！！！」

そしてそのままその場から逃げるようにかけだした
どうやら双子にも適わないときがあるみたい

後ろでは大人びた少年がシルクハットを少し浮かせて、おもしろそうに双子を見送っていた

「あ、

何か靴の裏についてる」
「どうしたの
靴浮かしてみてよ」
「何か踏んじゃったかな」
「さっきのダンゴムシじゃん」
「えー
容疑者だっけ？」
「違うよ
目撃者さ」
「あ、
さっきビッキーにジョセフィーヌのこと聞いとけばよかった！」
「熟女好きのことだよ
知っててても話してくれないさ」
「それもそうだね」
「手がかりなしだよ？」
「どうするー？」
「どうしよー？」

大きな人通りの多い道
目の前を真っ黒な馬車が砂煙を立たせながら走っていき、
たくさんの人が何かを話しながら目の前を通りすぎる

聞き込みしたって誰も耳を傾けてくれないことを双子はよく知っていた

ガラスでできたショーウィンドに背中を預けて、肩でもたれあって
姉は虫眼鏡を通してお手製の似顔絵の紙を見る
弟は何かを思案するように顎の下に手を当てた

迷子になった三毛猫
高貴な猫が野良猫へ
そんな猫は一体どこに行く？

「これが募集されたのは、半月前」

「半月も飲まず食わずじゃ生きていけないよ」

「しかも血統書付きの根っからの飼い猫」

「すぐに野良として生きていける？」

「猫は犬と違って順応力が高いからね
おそらくネズミでも捕まえて生きていってるさ」

「でもタウンは路地裏に数え切れないくらいいるよ
野良猫」

「ご飯は分け与えてくれないだろうね
それで、どうやって生きていく？
じゃあ死んじゃってるか」

「迷い猫と気づかず養ってもらってるか」

「そんな人がいるんなら野良猫は増えなかったさ」

「じゃあどうやってジョセフィーヌは生きていくの？」

「つまり、彼女は死んでしまってる可能性が高いということさ」

「生きてる確率は？」

「人に拾ってもらう可能性が彼女の生きてる可能性
およそ０％」

「なんだ
死んでたら見つかるわけないじゃん」

「生きてる可能性もあるということさ」

「その根拠ない希望を踏み散らかしてあげたいね
高貴な方は意外と頭が悪いのかな」

「だめなら適当にこれと似た死体でも持っていこうか
５万円はもらえるし、野良猫は手厚く土に返してもらえるね」

「猫に葬儀をあげる高貴な方の気持ちは僕には理解しがたいな
そんなにひまなのかな

それならタウンの野良猫みんな火葬場へつれていこうか」
「火葬？
猫の死体は燃やすの？」
「僕の考えではね
土葬なんて汚ならしいよ
伝染病を増やすだけじゃん」
「なるほどね
じゃあ僕らは燃やしてもらう？」
「さあ？
海にでも飛び込もうか」
「最後くらいは世界で一番大きくなるってことだね」
二人は顔を見合わせて笑った
するとどんっと誰かが彼らにぶつかった
「おっと
すいません」
彼らぐらいの小さな子どもは軽く会釈して歩いていった
弟はぶつかった場所を軽くはたくとにやりと笑う
「つけようか？」

「ばれないようにね
その方がおもしろいよ」

人混みに紛れて見えなくなった男の子を追いかけて、二人は波のなかへ入っていった

自分の髪の毛みたいな、
白に灰をはった空の下に音のしない路地

ついてった先は見慣れた住宅街
真っ黒な霧があたりを包んで、高いアパートが影をより濃く写している

緑の光が揺れた

「うわー
あんなとこに洗濯物干してるよ
真っ黒にならないのかな？」

「洗ったって意味ないんだから、
いっそのこと洗わなきゃいいんじゃない？」

「くはは不潔だね」

笑い声はやけに響くと、
弟は紙切れ握りしめて猫に向かって走っていった

姉は額に右手
腰に左手あてて

猫背で観察

からんと響いた空きビンの音に耳を澄まして、
目を開けば、その先に真っ暗の闇が繋がっているだけ

子供たちはどこへ行った
ジョセフィーヌはどこへ行った

「さあ、どこいっちゃったのかな」

弟が、転がる空きビン拾って写った影に呟いた

誰もいない空っぽの大きな建物
ぶら下がるは腐った綿布

「ひい、ふう、み」

3番目の路地の奥

「あっあそこ」

声を潜めて、呟いた

転がるマッチの滓拾い集めて弟走る
小さな手から、こぼれ落ちた細い木の棒
姉が踏んで駆ける

ブーツの音ならしちゃいけない

誰もいないこの空間
いてもいないなら死んだも同じ
誰も見ちゃいない
だから、静かに
でも聞こえなきゃ意味がない
だから、耳元で呟く
折角口が2つある
僕は右耳、僕は左耳
耳元で囁く

「みーつけた」

細長い路地に伸びた小さな丸い影
それに重なる長い2つ
そのあと伸びるは、
可愛らしい悲鳴

「えっあっ
うわあああああっ！！！？？？」

「くははははっ」

「いい反応！」

カタカタと揺れるガラス窓

静かな路地裏に、甲高い悲鳴と笑い声とが反響した

少し大袈裟な少年に、眉を潜めたけれど、、それでも可笑しくて仕方ない

腰を抜かして、へたりとしゃがみこむ少年の前で、双子は仁王立ちで見下した。

「おっ

お前ら、誰だよっ！？」

震える声の割には威勢がいい

そのアンバランスさに、また笑いが込み上げきてしまって、困ったように腹を抱えた

「さあ？

別になんでもよくない？」

「僕らより、こんな時間にこんな所でコソコソしている君の方が怪しいんだけど」

「おっお前らだって、一緒じゃねえか

コソコソしやがって

なんだよ
俺になんか用かよっ」

ぺっと突き放すようにいう少年は、目の前にいる気持ち悪いくらい
同じ顔をした二人に、いかにも早くどこかへ行ってほしいみたいだ

ましてや、片方の手には空きビンときた
いつ頭をそれで殴られるかわかったもんじゃない

「いい口の利き方だね
誰にそんな礼儀教わったのかな？」

「お前らこそ何様だよ！
こんな路地裏にそんな派手な服着てよく上がりこめるよな」

「君こそ
今こんなとこにいたら危ないんじゃないの？」

微かな笑みを浮かべたまま、ぽとぽとと、
握り締めてゴナゴナになった、木のくずを落とした

元は使い捨てられたマッチ

そんな跡形もなくクズになったそれが、
へたれこむ少年の目の前に落ちると
彼はぎょっと目を丸くして、うなだれる顔を上げて、双子を見つめた

「な・・・んで・・・」

悪ふざけが母親にバレてしまったかのように、彼は顔から色を無くす。

「まさか・・・
お前ら、工場長の息子なのか」

「まさか」

「こんな真っ黒いの出す工場建てるほど趣味悪くないよ。」

じゃあ、なんで

彼は口だけをそう魚みたいに動かして、動かない空気に、震えない鼓膜

「精一杯あがいたんだね
無駄なことを」

潤む瞳を前髪が隠して、灰色の地面を見つめる少年に、聞きなれた声が響いた

にゃーご

って

思わず目を見開く

「あ、ジョセフィーヌだ」

「うっしゃ！当たり！」

上から悪魔の声が降ってきた。
少年はゆっくりと顔を上げる
悪魔の視線は少年の後ろへ

確かに聞こえた鳴き声の前
誰かがさらった猫の名前呼んだ

潤んだ瞳を瞬きすると、
ぽろりと雫がこぼれた

双子は嬉しそうに跳ねる
まさか、こんなところにいたなんて
お望みの探し物
シュガーキャンディー３００個分の探し物

「やった
ジョセフィーヌ見っけ」

名前を呼ぶと、黒い尻尾を揺らして、少年の後ろから三毛猫が姿を表した

弟は嬉しげに腕を伸ばす
茶色い髪した少年は、急いで猫を抱き止めると、砕けた腰のまま悪魔を睨んだ
「この猫は、俺の物なんだ！
お前らなんかには渡さねえ」
双子は動きをピタリと止めた
冷笑たたえて、呆れた様な目で蔑んだ
言った瞬間後悔した
夕焼けの真っ赤な光は見えない暗い影
視界の隅に
映る空き瓶
「それ、
探し猫
持ち主が探してるんだ」
「だから
君の物じゃないんだよね」
「・・・分かってるよ
でも、仕方ないだろっ
拾ったのは俺だ」
腕の中のジョセフィーヌが苦しげに鳴いた

「何が仕方ないのさ」

「探し物
君返す気無いでしょう？」

「違う！！
返す気だった！！
なのに、あの女
あのクソ豚野郎がっ・・・！」

見下す、光のない４つの目
少し間があいて、少年の顔からふっと色が消えた

振り払うように首をふった

「……っ
なんでっ
俺は悪くない
俺返した！でも、受け取らなかったのはあっちじゃねえか！
だったら、受け取ってくれる奴に渡すのが普通じゃんか！」

「・・・受け取ってくれる人って？」
「お金持ちの珍獣コレクター？」

「そうだよ
なんかわかんねえけど、ミケのオスは高く売れるらしいから
それで・・・俺たちの暮らしもずっと楽になれるんだよ！
いいだろ？お前ら貴族にとって猫ぐらい一匹ぐらいいいじゃねえか
！」

「馬鹿だね
罪を認めたんなら
盗んだものは返さなきゃ
泥棒さん」

光の失せた目がまた少年を捕らえた

薄い光が指す夕暮れ
照らされた顔が双子の影を帯びる

「なっ…んだよ
来んなっ！！」

ぬっと伸びてきた４本の腕に抗う術もなく、もみくちゃに暴れる少年を
弟は足
姉は腕を押さえて

「なんでだよっ！？
なんで、なんで俺らばっかり！」

鈍い音の後、ガシャンとガラスが飛び散って、
ジョセフィーヌはどこかへ
走り去ってしまった

「馬鹿だね」
「馬鹿だよ」
ガラスビンに映る歪んだ自分の顔を見て呟いた
「そのまま何も知らずにぼろ雑巾になって生きていけばよかったのに」
「そうじゃなきゃ
中身を揉みくちゃにされることもなかったのに」
横たわる少年を見ながら、ゆったりと立ち上がる二人
影も薄くなってきた
回りが暗くなってきたから
さようなら
向こうでジョセフィーヌの鳴き声と豚の鳴き声が聞こえた
「ん、行く？
見つけたのは僕らですって」
「遠慮しとく」
「一日中捜し歩いて
手に入れたのはこれっぽっち」
「馬鹿なことをしたね」

ぽそりと呟いて、何事もなかったかのように双子は路地裏を後にした

遊びましょう

「さあ、今こそ、我らが出番のとき
世界を変える英雄は誰だ
きっとこの紙を読んでいる君以外にいない
立ち上がろう我らが同胞の為に」

カンカンカンカンカンカン
鐘の音が鳴り響いてうるさい馬の蹄と車輪が走っていく音

今日はうるさい日曜日

最近この町では、やたらと走り回る御兄さん方を見かける

昨日も一人、鉛筆塔のてっぺんから落っこちたらしい

なんだか噂好きのこの町で、振り回された一番の被害者だ

いや、一番は、
僕かもしれない

「あれ、ラルったらなにしてんの？
ん、なにそのチラシ」

後ろから聞こえた自分の片割れの声

チラシなんか投げ捨てて、路地の奥へと戻ってく
てんてんと小気味良くブーツが音をたてた
真っ昼間でも霧が濃くて薄暗い僕らのホームタウン
続く細い路地のど真ん中
仁王立ちで笑う君
なにが面白いのか、双子の僕にも理解できないよ
「別に、あれだよ
噂のインチキサーカス
そのチラシ」
「ふーん、チラシとかあったんだ
随分凝ってるね」
「違うね
多分、この騒ぎをおもしろがって便乗した暇人の仕業だよ
余ったお金で、無駄な紙を発行したのさ」
「へえ、
見せてよ」
「もう、捨てちゃった」
何それ

特に気にもならないくせに、ぷくりと頬を膨らませるもんだから、
弟はわざとらしくため息をついて、捨てた場所へと踵を返した
ぴらぴらと、風に揺れる紙切れは、今にも飛んでしまいそう
と、
まあ不意打ちに後ろから勢いよく走ってきた姉に押されて、転けそうになった
思わずブーツの先につんのめって腕をバタバタさせてなんとか顔面からレンガにぶつかるのはさけれたよう
「わっ
もう、転けそうになったじゃないか」
と、
ああ
馬車の巻き起こした風に吹かれて、やっぱり飛んでいってしまった
「あーぁ…」
なんとなく、予期したことが現実に起こるとは
がくりと肩を落とす弟
間抜けな弟に振り返って大層面白そうに見る姉は、謝りもせず、ひょいと片手を突き出した

「ほら、はやく
チラシが飛んでっちゃうよ」
もう飛んでいってしまったじゃないか
まさか、それを探すつもりかい
きっと弁解したって少女は聞かない
だって君は別にチラシになんて興味ないんだから
きっと走っていきたいんだ
何かを目的にして、探して、探し回って、遊びたいんだ
それは僕も同感
ぱしっといつも通り君の手を握る
柔らかいお互いの手
「で、まずどこから行こうか」
「ん？とりあえずここから出ないとね」
薄暗い路地を抜け、光溢れるタウンへと
きっと一人じゃあんなとこ行けやしない

でも、君がいるから行ける
情けない、弱虫な僕
でも、それは君も同じ
さあ、今日も遊びに行こうか

さよなら、ハーメルン

ハーメルンの笛吹男
鼠取りのハーメルン男が報酬を貰えずに子供を連れ去ったなんていう有名な話
ドイツ、ハーメルンで起きた子供誘拐事件を基に、様々な事実を練り混ぜグリム童話で書き起こされた

「で？
盲目の少女と足のない少年は、二人取り残されたっていうの？」

「小児愛者だったんだよ
気持ち悪い、ね」

「まあ、そういう解釈もあるわね
でも私は」

「じゃあその笛はすごいものだね」

「人を睡眠状態に陥らせて、思うがままにするっていうの？」

「あ、それって一種の夢遊」

「昏睡状態っていうのかな
音で人を誑かしちゃうのさ」

「ふーん、
夢の見すぎ…か」

「……
ちょっと！？
貴方達私の話聞いてますっ！？」

「あ、ミリアーナ」

「なんだ、居たの？」

「貴方達……。
いい加減にしなさいよ
読んでと貴女方がせがむから、わざわざ私がお本を読んでさしあげたんじゃない」

「でさ、言葉で人を誑かすって簡単に言うけどさ、」

「聞けやゴルァ」

わーわー
ミリアーナが怒った
こわーい

感情の欠片もこもってない声で、わいわい喚き出す双子

それを相手にする若い女性は、思わずはあとため息をついた
この年頃の女性の割には質素な部屋だけど、白と桃色で統一されているところはやっぱり女の子らしい
床に散らばる本の隙間に転がる双子と、スカートをふわりとさせて座りたたずむ綺麗な女性
双子の部屋とは違う部屋
どうやら今日は双子の家庭教師の日らしい
「ハーメルンは、この後どうなったの？」
ミリアーナの足の上に頭を乗せて、仰向けに彼女を見上げた姉が聞く
「さあ？
私には到底想像ができませんわ
貴女方のお得意な妄想にお任せします」
ツンとそっぽを向く先生に、姉は笑う
「仕方ないね
ミリアーナには、考えるほどの脳味噌は詰まってないのかな？」
彼女の足の上に顎を乗せて見上げる弟
見上げているのに見下している
そんな目

さすがに年下の子供に見下されてはミリアーナも黙ってられない

「お黙りなさいよ
一説では、洞窟に込もって、もう出てこなくなったとか
中で生きてるなんてことはないでしょうから…」

「集団自殺？」

「ハーメルンは一人で死にたくなかったのかしらね」

「どうして死ぬ必要があるのさ」

「洞窟の中では生きていけないでしょう？
それに、子供の首が周りの森に散らばってたそうだから、」

「えー生きてるかもよ」

「なにかしら
そんなに私の言うことが気にくわないのかしら」

冷笑を浮かべるミリアーナ
それを見て何が面白いのか、けらけら笑い声が響き出す

もうこの二人には何をいってもダメらしい

彼女は疲れたように、手を額に当てた

毎度毎度何をしてもダメだと思うのだが、それでもどうにかしてこの二人をギャフンと言わせてやりたい

我ながら大人げない

「ミリアーナは怒ったって怖かないよ」

「だって、ミリアーナは僕らのことが大好きだから」

彼女の意表をつく一言

ゆるりと緩む額の手

「今なんとおっしゃいました？」

「え、違うの？

僕らがやってきたらこんなにお本を用意してくれるじゃん」

「机からこぼれ落ちるくらいお菓子を用意してくれるじゃん」

「てっきり、僕らのこと大好きなのかと思ってた」

４つの緑がまっすぐに少女を見つめた

「バカね

侍女が勝手に用意するだけよ

私がするわけないでしょう？」

思わず、声を荒げる

そんな直球で言われてはなんと言っていいか分からないから

足に絡み付いてくる双子から、急ぐように抜け出した

柔らかい枕を無くした双子は不機嫌そうに眉を寄せて、固い床から
ゆっくり体をあげた

「素直じゃないなあ
もうちょっと素直になった方がいいと思うよ？」

「だから、気持ち伝わる前に逃げられちゃうんだよね」

「なっ
なんのことよ？」

まさか、
二人が知っているはずない
そう鷹をくくっていた私だけの秘密

「ま、いいけど
どうせもう消えちゃったんだし」

「死人の話はやめようか
で？
ミリアーナは、僕らのことが好きじゃないんだって？」

「ちょっと
待ちなさいよ
死人ってなんのことよ？」

これまた危機逃せない爆弾を落とされる
不安の種を成長させる嫌な一言

声を荒げるミリアーナが冷たい緑色の瞳に映ってた

「僕らの話、聞いてくれないね」

「僕らのこと好きじゃないんだよ」

「そう、
嫌いなんだ」

「ミリアーナは、僕らが嫌い」

まるで、淡々と話続ける
自分に言い聞かせてるみたいに

「何を言っているの？
私は貴女方が嫌いな訳じゃ」

「うるさい嘘つき」

姉がこぼした暴言

息を止めた
聞きなれているはずなのに、ひどく冷たい
軽蔑のような突き放されたような、なんだかいたたまれなくて

「帰ろ」

ぽつりと弟が溢した一言

不思議とやさしい

茶色と白が揺れて、
綺麗な緑色を揺れる赤色が追って、

「ばいばい」

放たれた一言に、酷く過去の自分を呪った

真っ黒な執事に見送られて大きなお屋敷を出ると、大きな馬車が丁度通りすぎていく

息苦しい空気と、騒音の中、静かな路地の中へさっさと逃げ込んだ

先をてんてんと歩く弟が、姉の手を繋いで話しかけた

「ねえ、怒ってるの？」

「違うよ、
拗ねてるだけさ」

「ヤキモチだ」

子供っぽい、だけど素直な姉に笑う

「お父さんは、僕らが大好き
だけど、お母さんの方が好き
ミリアーナは、僕らが大好き
だけど、ペーターの方が好き」

「当たり前じゃないか」
何をそんなに拗ねるのか
「僕も、
僕も一番になりたい」
路地裏に響いた珍しく掠れた小さい声
僕の耳にはいって、脳を溶かした
思わず足が止まる
弟が止まると、後ろの姉も止まって、狭い路地裏、僕らの世界
振り替えると、俯いた僕と全く同じ姿の君が
だけど、全然違う
僕と君とじゃ、
全然
薄く灰色と、水色がはったような白色
君の髪をすくって、そっと口付ける
やわらかいのが、触れる
小さな君が僕を見上げて
小さな僕が君を見つめて

君の前髪をあげて、額に唇寄せた
あたたかいの触れて、君は笑う

一番は君だったねって

だいすきだと
愛してるのだと

どんなに与えても、すぐに貪ってしまって、新しい愛を求めたがる
君はほんとに愛に貪欲

目を細めて、ほころぶように、暖かい笑みを見せた大事な人に、暗い路地裏が明るさにつつまれた気がした。
機嫌を良くした姉があやした弟の手を引っ張って、路地裏の先へと歩いていった

「あれ、」

先を歩く姉がふと、立ち止まる

「あれってさ、」

弟がひょこっと姉の影から顔をのぞかせた

「「あ」」

目が合った

路地裏の隅、血塗れた包丁を月夜に赤く光らせ佇む
どこか見覚えのある少年と

「あんまり良いとは言えないタイミング」

「やっちゃった？やっちゃったね」

とは、口走りながらも微笑みを崩さない双子
それは、目の前の悪魔がの正体を知っているからか

小さな通り魔は薄暗い路地裏で黄色の瞳を光らせ、双子を見ると、
白い歯をむき出して
三日月形に笑みを浮かべた

弟が前に出て、軽い会釈を
姉は後ろで小さくスカートを摘み上げる様な仕草で礼をする

「こんにちは、素敵な通り魔さん。
今日は月がきれいな素敵な夜ですね。」

「さぞかし血も騒ぐでしょうに。
ところで、今日は何用で？」

他人のことを言えるものか
双子は社交辞令様々礼儀を臥して、彼に心からの挨拶をした

「・・・今日？
ああ、今日は何しよっかな」

一度、その瞳の黄色が揺らいだ気もしたが、
口元に浮かぶ三日月形は変わらなかった

「そーだなあ、
今日は珍しくお前らに話でもしてあげよっか？」

血塗れた包丁片手に、お茶らけた彼らの雰囲気に乗る目の前の少年

「お話？お話は好きですよ
是非、聞かせてくださいな」

興味深そうに2人は笑う

「じゃあ、聞かせてやるよ
とてもとても哀れな哀れな少年の話を」

黄色がこちらから目を離さない

「……それはそれは、
興味深いですね」

双子の口元から笑みが消える

前の真っ黒い人は、三日月浮かべたまま一つ喉を鳴らして、
小さな体を揺らしてこちらに一歩を踏み出した

そして、まるで台本でもあるかのごとく流暢に語り出す

「とても貧乏な少年が、裏道にぎゅうぎゅうに詰め込まれた煤まみれの集合住宅に、母と暮らしていました。
母は働きすぎで枯れ木のように痩せ干そってなお働き続け、少年も同じように痩せ干そっていました。
彼には仲間がいました。
自分と同じ職場に働く、苦痛を共にしてきた仲間たち。
彼らはいつの日か幸せな日が来ることを、ただ神に祈るしかありませんでした。
そんなどこにでもいるようなありきたりな少年のお話。」

「けれど、その少年は手に入れたのです。
この環境から仲間と共に抜け出す手段
計画は順調でした。」

ところがどっこい、
両手を掌を上に耳の横あたりにかかげる

「あんまりにも、癪なことがおきました。
少年は、金持ち共に暴言を浴びさせられ、彼らの計画はそこで途絶えてしまったのです。
しかしながら、幸運なことに、もっと大金を手にいられる方法を彼は手に入れました。
神の御加護だと、みなは喜びました。

そんな矢先のこと」
また一歩こちらに近づく
「彼は奇妙な、化け物に、ココロを壊されてしまった」
語り部の光る黄色が双子を捕らえて離さない
「そっからは、悲惨さ
金ヅルを失って、豚を何匹もめった刺しにして、
転がってくみたいに、彼は壊れて壊れて、仲間さえも失って
今はこの路地裏で世界の底辺まで落っこちた」

一歩
二歩三歩

近づいてくる
通り魔

「ねえ、お前らさ
どう責任取ってくれるの？」

目の前で、血塗れた悪魔が、笑った
ぽとぽとと、薄くなった赤い液体が手にした刃物からレンガに染みる
黄色に浮かぶ透明の液体
笑いながら涙を零す通り魔に双子は言う

「申し上げたじゃないですか。
この世界で抗ったってムダだって」

通り魔は笑顔を崩して
涙をぬぐうと
キっと光の宿った目でこちらを睨んだ

その目は、確かにジョセフィーヌを盗んだ少年のものであった

ここまで突き落とされて
夜な夜な路地裏でおいはぎする人生にまで落ちてしまったというのに

ココロが壊れたとかなんだ言ってるけど、
君の瞳は
まだ生きることを諦めてないじゃないか

「・・・悔しいけど、
お前らの言うとおりだったよ
あれから、俺はそんなことに抗い続けて、
落ちていった
逆らった結果が今さ」

少年は、ははっと、乾いた笑い零して
からんっと刃物を捨てた

双子はそれを軽く一瞥くれただけで、取りに行こうとはしなかった

哀れな少年の話に興味があるのか
月を背にじっと見つめてる

「だから、
決めたよ

俺、この世界変えたい」

「・・・馬鹿だね
これまでと言ってること矛盾してるじゃないか」

「抗って、堕ちて、
今その苦しみ散々味わってるのさって話じゃなかったっけ？
ここまで来ても、分かんないの？」

「ははっ
そうだよ、お前らが俺に理解させようとしたこと
分かってる
だからさ、
ここまで堕ちたんだから
いっそのこと、最後まで抗おうかなって」

「馬鹿だね」

冷たい瞳で双子は目の前の馬鹿な人を見る

脳味噌の詰まってないそこらのドブネズミでも、最近じゃあネズミ捕りに引っかからないって世間の悩みの種にさえなってるというのに、ネズミ以下の馬鹿じゃないか

「ほら、
これ、見てみてよ」

がさがさと、
真っ黒いズボンのポケットから、くしゃくしゃになった紙切れを
皺を綺麗にのばして、こちらに手渡した

受け取った弟は、見覚えのあるそのチラシに眉を余計にひそめる。

「『さあ、今こそ、我らが出番のとき
世界を変える英雄は誰だ』・・・・？
何これ」

文を読み上げ首をかしげる姉

どうやら、革命派収集のための夜会の招待状らしい
こんなものよく堂々と配るものだ

チラシから、顔を上げ、双子は少年に視線を戻す

「今度、革命派の集いがあるんだよ
確か、主催は誰だったかな・・・
まあ、いいや」

「これに参加するっていうの？
どれだけ君は馬鹿なのさ？」

理解できない

「今すぐ、この招待状破いたっていいんだよ？」

「別に破りたければ破ればいいさ
今の俺はこの姿が招待状になる」

「巷で噂の、豚殺しって？」

「そういうこと」

へらっと、笑う

この少年には
もう何言っても無駄らしい

ようやく悟った双子は軽くため息をついて、踵を返そうとした

「なあ、
ちょっと待てよ」

耳に息がかかる
いつの間にそんな近くに来たのか、真後ろに、
もう一度刃物を手にした少年もとい通り魔

「・・・何？」

殺す気があるのかないのか、
手元で、刃物を遊ばせる少年

「お前らも、
俺と一緒に来いよ」

『世界を変えよう』

一瞬、二人の目が見開かれたように見えた

「…ばーか」

双子は笑って彼の額をこついた

「なっ・・・」

その瞳は嘲る様な物でなく、冷たいものでもなかった

真剣に話したのに、そうふざけたように返されては少年も驚く

「僕らの脳味噌は君みたいに腐ってもなければ、すっからかんでもないからね」

「せいぜい、君が満足するまで好きなだけ一人で堕ちていけばいいよ」

「ふざけてんじゃねえよ
お前らだって、こんな世界おかしいと思うだろ!?」

「うん、思うよ」

「え・・・」

息を呑む音が、静かな路地裏に響いた

固まる少年から目を離して今度は本当に踵を返した

「じゃあね」

「お元気で、小さな通り魔さん」

後ろでに手を振って、光の中へ消えていく2人の後姿を追うこともできず、ただ穴が開くくらいに見つめる

「なんで・・・」

ぎゅっと、握る刃物

「なんで、
そんな・・・…」

真っ暗な中、世界で一番深い深い底辺で、血に溺れた通り魔さん。
世界で一番光とはほど遠くて、うやうや外にも出れないし
全てを失ったはずなのに。

ガタガタ、ガタガタ
車輪の揺れる音。

「おやおや、これはこれは珍しい。可愛らしい御主人に奥方様。今宵はどちらへ？」

「夜会にでも。いいでしょうたまには。」

今日のロンドンも霧が濃くて空が見えません。

豚さんはブーブー鳴いてるし、煩さに耐えきれないネズミさんもチューチューうるさいです。

今日もいつもと変わらないロンドンです。

嘘つき、ハーメルン

真っ昼間
とある双子は今日も元気に町を駆け回るそうで

昨日は、えんぴつ塔のてっぺんで人を突き落としたし
一昨日は、だんご虫を潰してしまったて
さあその前は何をしたんだったか

とりあえず、今日は
風に吹かれて飛んでく紙切れを追いかけているみたい

「ほらほら、あっち」

「ほんとだ
まだ見えてる」

ばたばた人の波に逆らって、足の隙間、足ばかり規則的にばらばら
動く群れの中をぐんぐん抜けていく

ぴらぴら舞い上がる影追いかけて、中々落っこちてこずに風に吹か
れていくそれ

ぶつかりかける人々省みず
気づけば、人もまばらになって
町のはしっこまで来てしまった

それでも落ちてこないそれに、双子はさすがに息を荒げ、足を止めてしまった

「なにあれ」

「なんだか導かれてる気がするね」

ふざけて笑う姉に弟がため息をついて前を指差す

「この奥に？」

街の隅
ここまま突き進むと街を出ることになる
イーストロードの出口は畑道の続く道に出て、そのまま進むと小さな丘がある

今日来たウエストロードの出口は
森、樹海と言った方が正しいかもしれない

両親からも言われているが、言われるまでもなくこの奥には入りたくない

そんなうっそうとした深い深い森

馬車が一台通れるか通れないくらいの道
その奥５メートルも昼間だというのに、霧に包まれたように見えない

そんな中をひらひらとこちらの気も知らず飛んでいった紙切れ

「今日は、やめとこうか？」
と、弟が妥協の案を出した時
双子の横を一台の馬車が、西門を出ていこうとしていた
昼間なのに付けられたランプ
この奥に誰か住んでいるのだろうか
そんな一台の馬車が双子の好奇心に火をつけてしまった

「行こう」
「うん」

さっきの会話はどこへ行ったのやら
目を輝かせ、馬車の後を追った
蔦のはった西門を抜け、森に入る
狭い道に馬車は、スピードを落として着いていくのは容易かった
弟はポケットから一本のマッチを取り出して、姉はそこらに落ちている小枝を無造作に拾ってきた
「熱くない？」
「こうすればいいさ」

弟は服の紐一本しゅるりと抜いて、横に固めたものと、縦にしたものを手際よく連結させた

そして、マッチを摩って火をつけたら
即席ランプの完成

全部燃えてしまわないよう姉は小枝を何本か握りしめて、弟はランプ片手に馬車の後を追った

もう見失った紙切れのことは忘れ、ひたすらに森の奥を興味津々に探索する

あるのは知ってた
でも入ったことのない身近な新天地
立ち入り禁止の場所
何があるのかも聞いたことがない

道らしき道は1つしかないしあの童話のように何かを落とさずとも帰ってはこれそう

「うわあ
すごくぬかるんでるよ」

「水脈？川があるのかもね
最近雨は降ってなかったし」

「じゃあこの急斜は？」

「もしかしたら、山になってるのかな？
それなら川があっても不思議じゃないし」

「すごいねー」

薄暗い森の中、ピクニックでもしているかのように、泥に小さな足跡を残していった。

しばらく歩くと遠目に光が差し込んでいた。

空も木に覆われみえなかったところに、ぽっかりと穴が開いてるみたい。

日が差し込んでいるのを見て、そういえばまだお昼なんだね

と、立ち止まって弟は特性ランプを吹き消した。

「うわあ」

ガタガタと、付け方の悪い車輪の音。

規則的になっていたそれは、双子より少し前に行ったところで止まった。

明るい日が差し込むところで、スポットライトを浴びるように、傾いた馬車はギイと音をたてた。

誰か出てくるんだろう

弟は姉の口を片手で塞ぐと、音をたてずに草むらに倒れこんだ。

キィ…カタカタ
傾いた馬車がもっと傾いて、今にも外れそうな扉を開けて、誰か出てきた。
きっとこの馬車の持ち主。
遠目で息を殺しながら、双子は草むらからその様子を見つめていた。
出てきたのは、長いシルクハットを被って、これまた長いコートに身を包んだ背の高い紳士
ひょろりとした枯れ木のような人で、見慣れたハムのような貴族とは正反対であった。
日の差し込む場所、馬車の奥に大きなお屋敷があるのが見えた。
「多分、あのお屋敷の御主人かな？」
姉は小声で呟いた。
ふらふらしながら、枯れ木のような貴族はそのお屋敷の中に入っていった。
重い扉を、馬車を運転していたこれまた枯れ木のような執事に開けさせて。
馬車は直されることはなく、傾いたまま屋敷の目の前に置きっぱなしで、ぽっかり開いた木々の穴からの日射しを浴びていた。

しばらくその様子を呆然と見ていた姉と弟は、顔を見合わせると、服に付いた葉っぱや土を払いながら立ち上がった。

弟の頭に付いた木の葉を、姉がくすくす笑いながら払ってやった。

少し、照れながら弟は自分の頬をかいて、話し出した

「さあ、どうする？」

「探検だね！！」

弟は、ぎょっとして、間髪入れずに、大声を上げる姉の口を慌ててふさいで、しぃっと、人差し指を唇の前で立てた。

姉は失念したっというように、頬に両手をあててみせた。

その様子を呆れた目で見ながら、また小声で呟いた。

「この東の森の方に、お屋敷があるなんて聞いたことなかったよ。」

「そーだね。母さんも父様も、二人とも入っちゃダメって言うだけで理由は教えてくれなかったもんね。」

水色のエプロンドレス、さしずめ不思議の国のアリスをモチーフにしたような、スカートをひらひらさせながら、姉は回りながら答えた。

「理由なんて考えてもみなかった。

だって見た目からして、色々と危険そうだし、いかにも獣がうろついてそうだったからさ……。」

「理由はオオカミさんじゃないってこと？」

「さあ？
ただ、タウンじゃなくてこんな森の奥に屋敷をおいてる変人は危険だねってことさ」

楽しそうに皮肉に笑う弟
回りくどい言い方に、くるくる回っていた姉は、ぴたりと止まってきょとんとした顔を浮かばせた。

「…ふーん？」

「さしずめ、ハーメルンの洞窟ってこと」

ふむ、もう一度、屋敷を目を凝らして見る姉には多分伝わってないんだろう。

まあ、伝わっても特に態度を変えるようなことはないのだろうけど。

「……さて、姉さん」

「はい。」

声をかけられにっこり笑うと、弟に向かってうやうやしく、お辞儀をした。

「君はそれでも、屋敷に入る？」

「うん。」

「洞窟かもしれないよ？」

「うん。」

「じゃあ行こっか？」

「行こっ！！」

きゅっと、弟の手を握ると、二人はぺたぺたと、光の差すお屋敷へ走っていった。

人形屋敷

ドアの前に双子が立っている。
目の前で見上げると意外と大きなお屋敷。
ミリアーナのお屋敷より大きいかもしれない。
森の奥にこんなお屋敷があったんだーと、感嘆をもらす姉と、ふむと首をかしげる弟。
「どうしたの？」
と姉は問う。
「人気が無さすぎるよ。
こんな大きなお屋敷だもの、さっきの執事と紳士しかいないわけがない」
言われて姉は、もう一度視線を屋敷へと戻した。
「確かに静かだね…
こんな森の奥に住んでるから、使用人さんも少ないのかな？」
姉の言い分がよく理解できないが、弟はそのまま続けた。
「とにかくよほどの変わり者には違いないね。裏口を探そうか」
大体の貴族様なら、歓迎してくれるのだけど、変人奇人はどうしょ

もない。
正面からなんて危険すぎる。
そう踵を返そうとしたとたん、ギイとおとがなった。
振り向くと先ほどまで固く閉じられていた両開きの扉が開いている。
人気なんてなかったのに。
木々を風が揺らす音がする。
不気味な雰囲気に、姉はふっと荒い息を吐いて、弟にすりよった。
「…怖い？」
「ん。」
すりよる姉を抱きしめて、弟は嬉しそうに顔をほころばせた。
ほんとに正直だね、…まあ僕らの間に嘘なんか通せるわけないんだけどさ。
怖がりな癖に、人一倍好奇心旺盛な、自分の双子の姉。
きゅと手を絡めると、姉は落ち着いたように体を離した。
それでも繋いだ手は話さないまま、二人は扉の向こうの暗闇へ消えていった。
扉がしまった、と同時に明るい光が二人の目をつき刺した。
驚いて思わず目を閉じる。

そっと目を開ければ、そこには、
たくさんの子供たちがこちらを見て立っていた。

「っ……！？」

さすがにこれには弟も驚きが隠しきれず、お互いひどく強い力で手を握りあった。

青色、黒色、茶色に赤色

無数の目が自分たちを見つめてくる。
なんの感情も宿さない目で。

双子はこの目に見覚えがあった。
今までに何度見たことがある、まるで、人形みたいな子供たちの目を。

「おや、お客さんなんて珍しいねぇ。
何年ぶりだろう」

高いところから声がした。
思わず二人は声の方を見上げた。

広い玄関からまっすぐ続く階段を上がったところに、背の高いひょろりとした男が立っている。

身体中を黒で覆った青色の髪のその人は先程馬車から出てきた人物だった。

たくさんの子供たちに囲まれている二人の様子を見てか、口に丸めた手を当てて小さく笑った。

「そんなに怯えないであげてね。彼等は私の大切な生徒だから。」

「生徒？貴女は教師ってこと？」

「うん、そうだよ、僕はここの先生」

そう言いながら、彼は階段をゆったりと降りてきた。

それと同時にこどもたちは左右へと散っていった。

目の前に着たひょろひょろの紳士は、

双子に一礼して

「私の名前は、メリー、よろしくね。」

と、告げた。

双子はつられてお辞儀をする。

「僕の名前はラルフローレン、」

「私の名前はハミルトン。」

姉はエプロンドレスのスカートを摘まんで腰をかがめて、弟は胸に手をあて、頭を下げる。

その滑らかな仕草に、メリーは目を丸くして、ふむ、と呟いた。

「君たちは双子なのかい？」

「私が双子の姉、」

「僕が弟。」

瓜二つな顔の口角を吊り上げて、瞳と髪の色の違う二人は笑う。

「すばらしい。」

メリーはにこりと笑って、白い手袋をはめた両手をパンっと叩いた。

端正な顔が崩れ、メリーは人懐っこそうな笑みを浮かべる。

「君たちみたいな可愛らしい客人に出会うことができるなんて、私は運命に愛されてるのかなあ。」

ふふっ、花が咲きこぼれるような表情に双子の緊張も緩んでいった。

先程の怪しげな屋敷の雰囲気とはかけ離れている。

こどもたちに対して、優しい微笑みを浮かべる情愛溢れる紳士に見えた。

姉はぽそりと弟に耳打ちする。

「素敵な人ね。」

こくりと頷いた弟もまた耳打ちしかえす。

「悪い人には見えないね。」

二人は顔を見合わせて笑った。
双子の様子を微笑ましい顔で見つめていたメリーは、パンっとまた両手を軽くはたいた。
「そうだ、こんなに可愛らしい客人をいつまでも玄関に立たせておくなんてもってのほか。さ、どうぞ中へ。おいしい紅茶を入れましょう」
にこりと笑い、階段へ続くように、道しるべをする青年。
こちらを見上げた双子に軽くウインクをした。
ラルとミルは顔を見合わせてくすくす笑うと、彼に一礼をして奥へと足を進めていった。
双子が階段を上り詰めると、目の前の扉が自然と開く。
執事が誰かが隠れているのかと思いきやそうでもない。
「さっきの子達かな。」
弟の呟きに姉はそうだね、きっとそうだよ。と、ご機嫌な様子で答えた。
双子が中に踏みいると、
ばたりと、勝手に扉が閉まる。
閉まる直前、後ろを振り向いた弟の目にまだ階段の下の玄関にいるメリーの姿が写った。

こちらを見上げる青色の瞳。
その目が、怪しく細められていたのに気がついたのは、扉が完全にしまったあとだった。

「……っ！？」

弟の動きがピタリと止まる。
姉は、驚いて彼の方に振り向いた。

「どうしたの？」

「……気のせいじゃない。」

「え？……っ！？」

姉は、のぞきこんだ弟の顔の青さに言葉を失った。

「ラ…ル…？」

滅多に見たことのない弟の表情に、姉は身を固くする。

「姉さん、
僕の手を握って。」

姉は、黙って弟の手を握った。
弟は頷いて、力強く、その手を握り返した。

そしてまた続ける。

「いい？姉さん、
僕が駆け出したら、一気に走り抜けるよ。」
弟の切羽詰まった表情に、姉はすべてを悟ったのか、こくりと頷いた。
ぎゅっと握り会う二人の手に、響く、心臓の音。
足音もなく近づくなにかに、息を潜めて、がチャリとドアノブのひねる音が聞こえたとたん、
二人は走り出した。

「おっ……と、
どこへ行くのかな。」
「はっなせっ！！！」
駆け出した体は絡め取られ、二人まとめて腕におさめられる。
もみくちゃに暴れまわる二人を宥めるように優しい手つきで、そのくせ、その細い腕に込められているとは思えないほど力強く、二人を捕まえてしまった。
「おやおや、さっきはあんなに大人しげな紳士淑女に見えたのに、やっぱり子供なんだねえ。元気がいいね。」
「うるさい！！
お前、僕たちをどうするつもりだ！！」

腕の中でまだ抵抗を緩めない二人。
姉はパニックに陥りかけながらも、繋がれたその手を頼りに、必死で暴れまわる。
弱々しい子供の力で。

「ん、どうするって？
さっき言ったじゃないか、お茶をおもてなししようって、ね？」
甘い声でさとすように話すメリーは首をかしげて異様な色気を醸し出している。
けれどそんなもの子供に通じるはずもなく。

「ラルぅ、ラルぅ！！！」

姉の絞り出すような声に、弟は我に帰った。

「ねえさんっ…」

ぎゅっと握りしめた手の力が弱まっていく。弟は外れないように強く握り返した。
いままで様々な、恐ろしい現場を見てきた二人だったが、直接的に自分達にピンチが訪れるというのは今回が初めてだった。
動揺する二人を尻目に、青い瞳を細めて青年は恍惚とした表情を浮かべる。
自分の腕の中に入った可愛らしい客人。

いいようもない興奮に襲われていたのだ。

「君たちはほんとに、可愛らしいねえ。」

舌なめずりをして、メリーはそのまま奥へと進んでいった。

「なんなの？これは。」

不機嫌丸出しの少女の声が響く。

先ほどまで不安で震えていた彼女は、どこで気を失ったのか、気づけば見知らぬ場所に座っていた。

ふかふかのクッションが、床一面に敷き詰められた狭い部屋。

その部屋の壁にもたれるように、彼女は座っていたのだ。

そのうえ、着ていたはずの水色のエプロンドレスはどこへやら。フリルのたくさん施された白いブラウスに、茶色のカボチャぱんつ、ボーダーのニーハイソックスをはいている。

「趣味じゃないね…」

ぽそりと呟く。

そして、なぜかはわからないけど、自分の足を枕にして丸まって寝ている双子の弟を見おろした。

「…どうして寝てるのさ。」

こんな非常事態に、こんな安らかな顔ですやすや眠る弟を見て小声で呟く。
先程まで寝ていた自分が言えることでもないけど、こんなときにやすやす寝るような弟ではない。

自分よりもっと理知的で、頭の切れる賢い弟。それだけに言うことがたまに理解できないこともある。双子だから、お互いのことなんでもわかってるつもりなだけに、わからないと少し寂しい。

「僕ら…ずっと一緒だよね。」

聞こえないように、安らかな眠りから覚めないように、寝息をたてる弟の頭を撫でて軽くその髪にくちづけをした。

口をはなしたとたん、もぞもぞと動きだして焦ったが、彼は僕の腹に顔を埋めると、また寝息をたてだした。

あ、あせった。

驚いて離した両手の行き場をなくして、ぷらぷらさせながら、ふう、と息をついた。

こんなに顔を押し付けて苦しくないのかな。
そう思いながら考えた。

多分、僕らはメリーに眠らされたんだろう。そしてこの部屋に連れてこられたんだ。
この部屋は、きっとあの大きなお屋敷のどこかの部屋。

優しい笑顔に騙されて、簡単に屋敷の奥に入るなんて、こんな簡単に相手の手の内に陥るなんて。

げんなりしたが、僕自信彼に対して、全く疑いを持っていなかったわけではない。

確かにあの笑顔で、だいぶ払拭されたけど、やっぱり油断はしてなかった。それにだめだったらどこかから逃げ出そうって考えてた。

なのに、

青ざめた顔をして、正面から逃げ出そうとした弟の姿を思い出す。

なにがあったの？

ラルのことだ、きっと考えがあったんだろう。それに、ラルが僕以上に油断してたなんて考えにくい。

ぼう、と整理していた僕は、かなり考え込んでいたらしく、ここから逃げだそうと全く考えていなかった。

だから、気づかなかった。

「おはよう、ミル。
お目覚めはいかが？」

うさんくさい紳士の存在に。

「……っ！？」

いつこの部屋に入ってきたのか。

目の前でにこりと笑うメリーに身を固くする。
もう、そんな笑顔に騙されないぞ。
僕は目を鋭くしてにらんだ。
「あははっ。
かわいいなあ。
あ、そうだ。居心地はどう？
そのクッション、ふかふかでしょ？
特注品なんだからー」
にこにこ笑いながら、自分自身もふかふかのクッションに包まれながら話しかけてくる。
年のいい、青年が、雰囲気やその顔からしてかなり幼くは見えるけど、可愛らしいクッションを抱き締めてこちらに屈託ない笑顔を見せながら首をかしげてくる様子に、
「吐き気がするよ。」
ぺっと吐き出したその声は、あまりに暗くて、ぐちゃぐちゃの沼みたいな雰囲気を作り出した。
まだ幼い彼女から発せられたようには思うない。
一瞬、ぽかんとした顔をした彼は、すぐに笑顔に戻ったが、その顔はさっきのようではなく、なにか含みのある笑みだった。
「いいね、ますます気に入っちゃった。

君たちみたいなこ、はじめて。」

はじめて？
まるで今までも同じようなことをしてきたような発言に眉をひそめる。

そして、屋敷に入ったときに見た、たくさんのこどもたちの姿を思い出した。

「！まさか、君っ…」

「頭のいい子は好きだよ。
まあ、そこの彼は、早々に気づいてたみたいだけどね。」

はっとして、下を見る。
まだすやすや眠る弟。

思わず険しい顔だった自分の顔の力が抜ける。

「ラル…」

こんなに騒いでも起きないなんて、余程強い薬を飲まされたのかな。

僕は、ただ彼を見つめた。
もう目の前の、メリーの笑顔を見たくなかった。

「じゃあ、もうわかってると思うけど、君たちはもう、僕の生徒。
大事に大事に扱ってあげるから、ちゃんと先生の言うこと聞くんだよ？」

返事はしなかった。
したくなかった。

「返事は？」

「……やだね。」

答えたのと同時に、髪を捕まれた。
お母様似の、白い猫っ毛。

捕まれたまま持ち上げられ、うつむいていた顔を上げさせられる。

いたい。

「だめだよ。
先生を怒らせちゃ。
僕は君たちをとーっても気に入ってるんだ。
だから、大事にしたいんだけどね、でもお人形にしてあげてもいいんだよ？
かわいいかわいい僕だけの操り人形。」

僕をじっと見つめる男の青い目が、悩ましげに歪んでいく。

吐き気がする、吐きそうだ。
足元に寝ている弟がいなかったら吐いてた。

こんなやつ、前にも見たことある。

確か、そいつは自分の女に対して、自らの特殊な性癖を押し付けていたけど、子供に対して、しかも不特定多数に対して。

こいつは、僕らをヒトとみなしてないんだ。
僕らは…かなりの奇人の家に迷い込んでしまったみたい。
「ねえ、どうするの？
僕の生徒になる？
それともお人形になる？
さあ、どっち？」
「どっちもやだ。」
間髪入れずに答えてやった。
どうだ、と胸を張る前に、首に鋭い痛みを感じた。
「っ……！？」
ぐりっと、埋め込む、歯。
揺れる青い毛が、頬に触れる。
後ろの壁についた大きな手。
あつい、息
噛まれてる。
「やっめて！！
離してっ…」
僕の声なんて、無視して、ぐりぐりと平たい歯をもっと深く刺そう

と噛んでくる。
いたい、いたい
目に浮かんだ涙が、ぽろりとこぼれる。
「はっなせっ…」
息も絶え絶えに、思わず乱暴な言葉遣いになる。
やだ、やだ。
いたい、いたいよっ…
「かっ…はっ」
ぽろぽろと、頬を伝って落ちる涙の量が増えたとき、首の肉を圧迫していたものが消えた。
「ふっ…はっ、はあ、はあ」
息が荒くなる。手加減なしに噛まれた。血が出ているのかいないのかわからないくらい痛みで感覚がない。
こわい、こわいよラル
起きて。
だめ、起きちゃだめ。
起きたらラルも。
「泣いてるの？」

声に顔をあげると、さっきまで僕の首を噛んでいたメリーが僕をのぞきこんでいた。

そのメリーの顔が僕と目があったとたん、真っ赤になる。

「わっ……どうしたの？
すごく、かわいい、かわいいね！！」

子供みたいに顔をきらきらさせるメリー
意味がわからない、わからなすぎて怖い。

そして急に持ち上げられる。
足に乗っかっていたラルの頭はふかふかのクッションの上に落ちていった。

そのまま抱き締められ、ながい腕のなかにしまいこまれる。

もう言葉も出ない。
噛まれたあとがあつく、じりじりと痛む。

「やわらかい…かわいいねえ、ミルは。
ねえ、お人形さんも、生徒になるのも嫌なら、私の奥さんになってよ。」

耳元でささやかれる低い声に、めまいがしそうになる。

今、なんていった？
やだ、やだ
やだやだやだやだやだ

こわい、こわいよ。
体に巻き付く腕が怖い。
耳にかかる息が怖い。
首があつい。
心臓がものすごく音をたてている。
ねえ、僕死んじゃうの？

「ねえ、お兄さん。
その手を姉さんから離してくれないかな。」
「……っ、」

ラル。

そう呼ぼうとしたのに、音が出ずに口だけが動く。
喉が引くているのだ。。
ラルが服の裾を引っ張っているのに今さら気づいた。

「おはよう、ラル。
気分はいかが？」

にぱっと笑うメリーは、弟のいう通り姉を降ろす。
雰囲気に気圧されたというよりは、別にどちらでもいいから従った、
という感じだった。

メリーの言葉を聞き流し、降ろされた姉に抱きつく。

「、寝ててごめん。」

姉の肩に顔を埋め、小声で呟く謝罪の言葉に姉はただぷるぷると顔

をふった。

そして、弟は首の噛み痕を見ると、余計に顔を険しくした。

「やっぱり二人ともお似合いだよ、その服！
双子だからね、お揃いの服を着せたかったんだあ。」

言い知れぬ恐ろしさが二人を襲う。
僕らは捕まってしまったのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1478ba/

超ひも

2012年1月6日13時46分発行